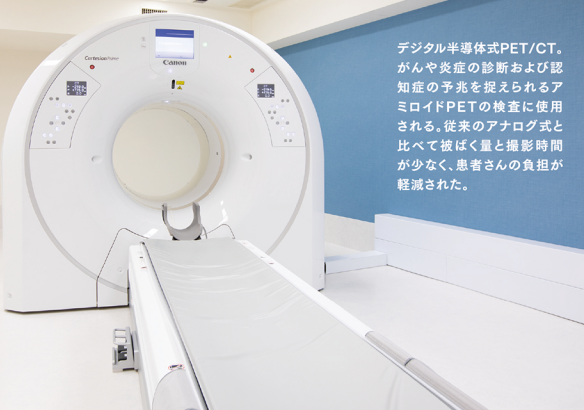




デジタル半導体式PET/CT。
がんや炎症の診断および認
知症の予兆を捉えられるア
ミロイドPETの検査に使用
される。従来のアナログ式と
比べて被ばく量と撮影時間
が少なく、患者さんの負担が
軽減された。



「画像診断では、所見の解釈が難しいこともあるため、読影能力を高める必要
があります」と福倉教授。



X線を使用しないため、
放射線による被ばくがないMRI。「多くの情報が
得られるので診断が難
しい面もありますが、とて
も有用性の高い機器で
す」と福倉教授は話す。

Department of Radiology



福倉 良彦 教授
Fukukura Yoshitiko

■ 専門医
日本医学放射線学会放射線科専門医
日本核医学会核医学専門医

大学では、学生に将来医師となる
にあたっての検査技術や治療法、
倫理だけではなく、患者さんやメ
ディカルスタッフをはじめとするま
わりの人への接し方、医師として
の心構えや立ち居振るまいを教
育することを大切にしています。



(左)月1回、多職種のスタッフで行なわれるカンファレンス。(右)X線を利用して体の断面の画像を
撮るCT。最適な撮影方法により高精度の診断ができる。

医療最前線

>>>vol.95

川崎医科大学附属病院
放射線診断科

Report!

デジタル半導体式PET／CTを用い、 より高い精度でがんを早期発見。

二四時間三六五日、
多様な病気の発見に取り組む。

X線(レントゲン)やコンピューター断
層撮影(CT)、磁気共鳴画像(MR
I)、陽電子放出断層撮影(PET)な
どの検査を行ない、これらの画像から
病気や病状を診断する放射線診断
科。川崎医科大学附属病院の同科で、
迅速かつ質の高い画像診断のために
日々努力を重ねているのが、福倉良彦
教授だ。同科では、約二〇名の医師が
ローテーションを組んで二四時間三六
五日緊急画像の対応を行なっている。
またガイドラインや論文を検討して
個々の患者に合った撮影方法を決定
し、さらにダブルチェックによる質の高
い画像診断報告書を作成している。そ
のほかにも臓器ごとにサブスペシャリス
トを決め、各々が各診療科の医師との
ディスカッションやカンファレンスを重
ねるなどして知識を深めている。

二〇二三年一〇月に、CT装置を組み
合わせた、デジタル半導体式PET装
置を導入しました。PETは全身の細
胞の機能や代謝を画像化するもので
す。たとえばFDG／PET検査で
は、活動性が高い炎症やがんほど多く
のブドウ糖を必要とすることを利用
し、多くの糖を取り込んだ炎症やがん
の有無を調べます。それにより、悪性
の程度や炎症の活動性および進行具
合などを診断します。新たな装置は
従来のアナログ式装置より解像度
が高いため、より小さながんを発見でき
るようになりました」と福倉教授。また、

二〇二四年一月からはアルツハイマー型
認知症の予兆を捉えられるアミロイド
PET検査も開始している。「画像診
断では、よい画像を作るためにどんな
撮影方法を用いるかが重要です」。そ
う話す福倉教授は、カルテを詳細に参
照して身体状態や疑われる病気を把
握したうえで、CT約三〇〇通り、MR
I約一〇〇通りの撮影方法のなかから
個々の患者さんに最適な撮影を行なっ
ている。「検査も治療も患者さん第一
主義。たとえば、実際の診療では、がんの
可能性が何パーセントかで、経過観察
するのか治療するのかに分かれま
す。治療法の選択にも影響を与えるの
で、画像報告書でその確率をきちんと
伝えることが患者さんのメリットにつ
ながります」。さらに、検査の三か月、
半年後に被験者すべてに必ず行なっ
ているのが、カルテによる診療経過の確
認。「画像診断の結果と治療経過を答
え合わせすることで、放射線診断医師
のレベルを向上するとともに、さまざ
まなデータを取り、診断の精度を高め
ています。実は、画像報告書の作成と
同じくらい、撮影方法の決定と治療経
過の確認に時間をかけています」。

そう話す教授を含めた同科の医師
たちは、今日も、画像やカルテをはじ
めとする膨大な資料をもとに、最適
な治療への道標となる画像診断に取
り組んでいる。

お問合せ

川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577

☎086・462・1111
<https://h.kawasaki-m.ac.jp>

※写真は取材用に撮影したものです

■2024年12月25日号掲載 本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。